

大地震の教えるもの

東京 柴 孝也



スマトラ沖大地震と巨大津波による犠牲者数は、世界一〇カ国で十五万人を超える数字が出ている。地球儀では裏側と言うか、下側と言うか幸いに日本には津波は来なかった。しかし、多くの旅行者がタイやスリランカなどで犠牲になっており、未だ遺体が確認されていない……と遺族にとつてはいたたまれない事であろうと何の足しにもならんが

同情する心を禁じえない。自分はタイ（バンコク）、インドネシア（ジャカルタ）と大きな都市には訪ねたことがあるが、所謂リゾートには縁がない。しかしながら、テレビの映像で見る限り、あの厚化粧した小屋に津波が来たならば、根こそぎ持っていかれることは誰にでも想像できるだろう。特に唐丹出身である防波堤を見て育った者には、理解できるでしょう。

テレビの映像で潮が引き始め、砂浜や岩の間に魚が上がっているのを珍しそうに取っている絵があったが、唐丹出身者なら少なくとも我々の年代の人なら、すぐ

に逃げたであろうと考えられるので、ペンを持つ気になりました。小さい頃、昭和八年の津波は夜明け前だったから皆寝込んでいた。「カラ、カラ、カラ……」と何の音だろうと聞き耳を立てると、海からの音で潮が急に引いて、小石がぶつかっている音だったのだ。自分は唐丹で育った昭和二十年代には、局の坂から下に降りるとすぐに棧橋があった。危ないとも思わずに船を掻き分けては泳いでいた。沖に向かって棧橋の左側に小さい岩があって（今の冷蔵庫辺りか？）普段は見えないが引き潮にはかすかに頭を出していて、

そこまで一生懸命泳いだものです。「その岩が下まで見えるような引き潮で、小石が音を立てていたら逃げなさい、局の坂の今という佐々木健太さんの家までは逃げるよう」と先人から教わっていた。

話を戻すが、満潮や干潮と地球にはリズムがあるものです。どこに旅行に行ってもその予定にない引き潮の時には浜から逃げるのは当然でしょう。それが危機管理であり、国の危機管理としてはよく耳にするが、家族・家庭にとつても危機管理の意識は大切なことを教えているのではないでしょうか。

家族旅行で息子さん一人だけ助かった小学生がいたが、惨いようだが両親に危機管理の意識があったのだろうかと言いたい。

報道によると、タイ南部で飼われていた観光用の象八頭が津波を事前に察知し、来襲前に近くの丘に目掛けて疾走し、背中に乗せていた観光客一〇人の命を救ったという。象でもとは言わないが、自然に危機を察知する予知能力があるのが動物なのだ。人間はそれを忘れていくのかもしれない。

唐丹の人、盛岩寺の檀家の皆様ならば、津波により大きな打撃を受けた事のあつた唐丹町であることを子供達に伝え、家庭・家族の危機管理としてご一考してもらえれば幸いです。

*この原稿は一月五日に頂きましたので、最終死亡者数が異なっています。